

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

1993 8



お茶の水女子大学
平成
1993. 7 - 6
愛贈
図書館

楽しくもりつけ

保育給食

おいしくいただく

楽しくおいしい料理作りのために、温かい心のこもった料理の工夫をまとめた、安全で衛生的な食事を提供。



素材を100%生かした料理作りと健康な食事の取り方を中心に、おいしい料理作りのコツをまとめました。

新しいメニュー調理例、月別献立表、作り方、材料それぞれの調理ごとに一人当りの栄養価計算付き。料理作りのポイントがついていて、おいしい料理作りに役立ちます。

保育園での給食という事情を考えて、栄養価が計算されています。見やすいオールカラーページ。

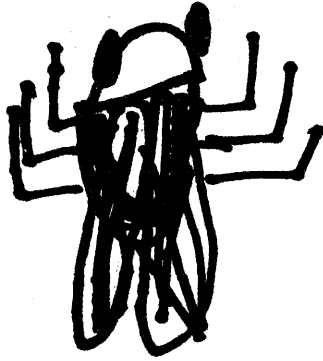
小林久子・野村迪代／著

B5判・184頁・定価3,800円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼 児 の 教 育



第92卷 第8号

幼児の教育 目次

——第九十二卷 第八号——

© 1993
日本幼稚園協会

写真・子供讃歌……………(4)

〈巻頭言〉子どもの理解・受容・指導……………秋山 和夫……………(6)

荷物……………津守 真……………(8)

土づくり……………小宮山洋夫……………(12)

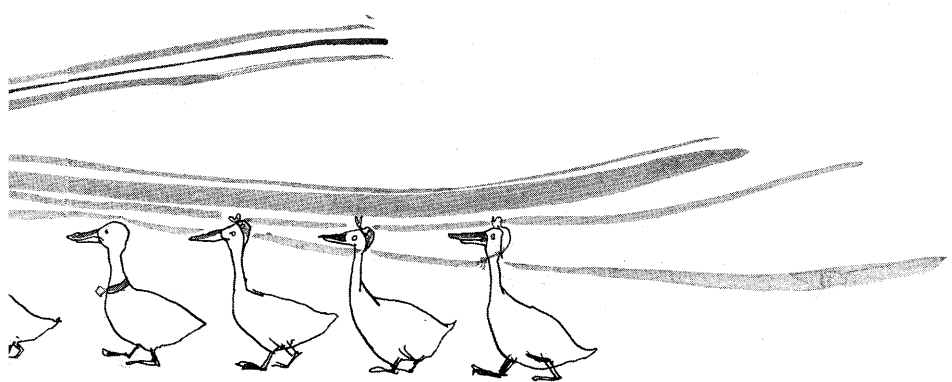
特集〈緑蔭図書紹介〉

子どもたちの〈遊び場〉を考える……………小川 剛……………(18)

『鳥獣戯語』……………皆川美恵子……………(21)

子どものごっこ遊びを楽しみ、理解するために……………内田 伸子……………(24)

『政治をするサル』他三冊……………柴坂 寿子……………(28)



『ミスエデュケーション』子どもをむしばむ早期教育』……田代 和美……(31)
ベッツィ・バイヤースはいかがですか………入江 礼子……(34)

堀合先生に学ぶ(5)………立川多恵子……(39)

だいじなことはみんな子どもから教わった………岩上 節子……(47)

子どもたちへのまなざし(4) デカルコマニー………松井 とし……(50)

ある日の育児日記から(32)………佐藤 和代……(54)

婦人宣教師、ミセス・プラインの「おばあちゃんの手紙」(9)……小林 恵子……(55)

表紙・紺野 千秋／扉題字・堀合 文子

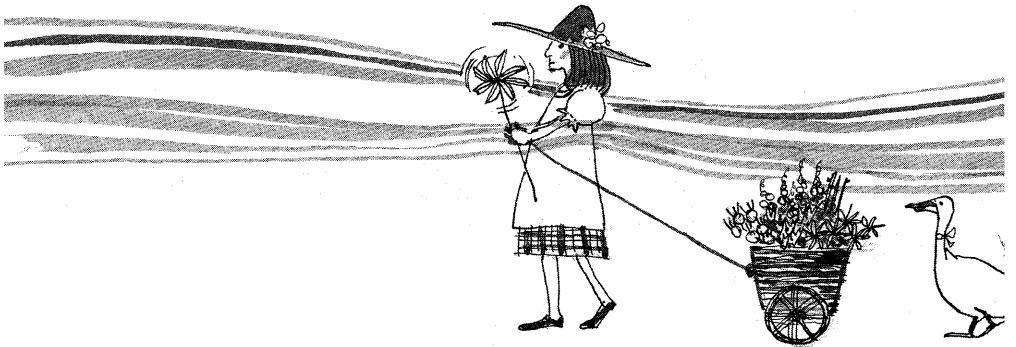
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／田代 和美

田中三保子・岩上 節子

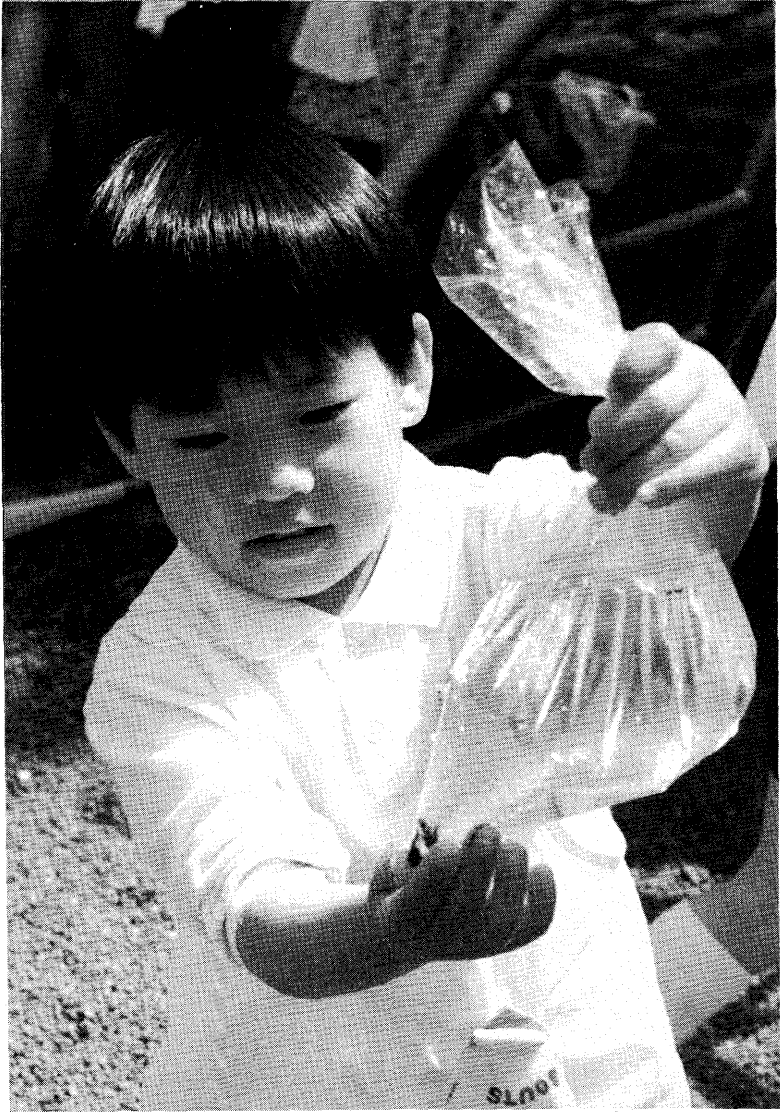
編集部・大沢 啓子





摄影・平野 清

— 子 供 讚 歌 —



子どもの理解・受容・指導

秋山 和夫

新しい幼稚園教育要領や保育所保育指針では、「子どもから」の発想が大切にされている。子ども一人一人の発達特性や、それぞれの子どもの興味や関心を理解し、把握することなしに、一方的に保育者が子どもに活動を指示したり、強制することを止めようというわけである。

幼児が自分で遊びを見つけて、主体的にその活動を展開していくことができるような態度や能力を幼児に育てていくことが望ましいことだと考えられている。

自発性とか主体性は、現代のような変化の激しい社会、生涯学習社会においては、必要な能力である。そのために、幼稚園から高等学校に至る学校教

育においては、自ら活動する意欲や活動することの楽しさや成就感を育てることが、重要な課題として示されている。

ところで、子どもの自発的、主体的な活動を育てていくためには、子ども一人一人の行動特性や心の内面を理解することが必要となる。それぞれの子どもの興味関心、長所は何か、友達と遊べない理由は何かといったことから始まって、さまざまな側面から子どもを理解していくことが必要となる。

しかし、子どもの行動は、保育者の価値観に合致しないものも多い。例えば、友達をたたき、花壇の花をやたらと摘むといった行動をする場合、それを一方的に禁止するのではなくて、その行動が起る理

由に思いを巡らしていくことが、子ども理解でもあ
る。

子どもと同じ立場に立って考え、あるいは、行動
してやるのが受容である。相手の身になることが
受容である。精神分析学の立場の人のみならず、心
理学の人々も、最近では子どもを受容することの大
切さを強調している。

子どもを理解し、受容することが大切である理由
は、保育者や大人の、子どもに対する一方的な期待
や要求に向けて子どもを引っ張っていくことを止
め、子どもの内面から湧き出てくる自発的、主体的
な活動を育てていこうということにある。

教育という仕事は、子どもを望ましい方向に育
て、高めていくことである。その具体的な活動を指
導ということばで表現している。最近では、指導と
いうと、保育者の一方的な要求やねらいが先行する
というので、援助ということばが好んで使われる。

それは、子どもの要求や活動を支援することが望ま
しいということからである。

たしかに、子どもを理解し、受容することは、保
育に当たって必要なことである。最近では、子ども
を理解し、受容することが、そのまま、教育あるいは
保育であると受け止められる主張が見受けられる。

精神分析の専門家の間にも、子どもを理解し、受
容することが、そのまま治療になるという考え方
と、子どもの理解、受容は、治療のための前提であ
るといふ二つの立場があるという。

幼児教育における指導を考える場合、子どもの理
解、受容は、指導のための必要条件であるとするの
か、それはそのまま指導のための十分条件でもある
とするのか。

このあたりの整理を十分行っていくことが保育の
質を高めていくために、必要なことだと私は考えて
いる。

(岡山大学)

荷物

津守 真

子どもが傍にいる生活は、大人にとって恵まれたことである。

私はこの頃とくに身辺多忙なので、いろいろと煩瑣な思いを持ち込んで保育の場に出てゆくときがある。そんなとき、子どもが傍に寄ってきてくれると、忽ち人間の根底にふれて、それまでとは別の次元で私は動きはじめ。

福音書の中に、「富める青年」に向かつてイエスが、金持が神の国に入ることは何とむつかしいか、らくだが針の穴を通る方がやさしいと言われる箇所がある。金持の青年の心は、手放せないもので一杯になっていたのであらう。そのような心の状態のときには、

「神の国」も心の平安も訪れる余地がないことを言われているのだろう。私は何日もこの同じ箇所を考えていた。

この日、いつも私とゆっくりと過ごすことから一日をはじめると一緒にいたとき、四月から入園したＹくんとふと目が合った。Ｙくんは私を見てにっこり笑った。

Ｙくんはいつも三輪車の前の荷台に、入りきれないほど沢山のぬいぐるみや電車をいれていて、だれかがそれを一寸でもさわると、大声をあげた。背中にはいつもリュックサックを背負っていて、弁当を半分食べると残りの半分をリュックにいれて帰るまでそうしていた。ことばを話さないこの子どもには、好きなものや、やりたいことが一杯あって、それを手放せないでいるように思えた。この日、私を見たＹくんの笑顔が心に留まっていた。

ひるころになって、何人かの子どもたちが、新しく作った白木の香りのする戸棚の中に入ったり出たりして、ぬいぐるみまで持ちこんで、内と外のおそびをたのしんでいた。いつものＴくんが戸棚の中でプラスチックのみかんの粒を見つけ、私の口にいらしたので、私をそののみこんだふりをして手の中に握って見せた。その子はすぐに私の掌を開いて、みかんの粒があったと言って、何度もこのおそびをせがんだ。ふと気が付くと、さっきのＹくんの足が私の足にからめられている。Ｙくんはその足を少しずつ動かして私を引っ張ってゆこうとする。私をどこかに連れてゆこうとするらしい。見ると、小さな容器にプラスチックのぶどうやバナナをいれたのを手に持っている。手を引いて連れてゆくなどとい

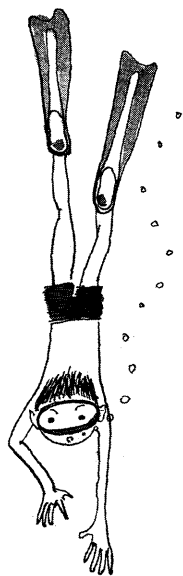
う大それたことはできないという具合に、Yくんは私の顔は見ないで、足をからめて引張ってゆこうとしたのだった。

Yくんと一緒に二階にゆくと、トースターにプラスチックの容器がいられてあり、Yくんは私にそれを見せた。私の後を追って二階に来たTくんの相手をする私のところに、Yくんは何度も来て笑いかけた。Tくんのプラスチックのみかんの粒と、Yくんのプラスチックの果物の入った容器とが私の頭の中で重なった。Yくんはいつも私がTくんと遊んでいるのを見ていて、同じように私と遊びたいのだと思った。二人の子どもの間にはさまれながら、私は一生懸命にYくんと向かい合った。

この日の午後、三輪車に乗っていたYくんは、リュックサックも背負ってはず、荷台に荷物も積んでいなかった。

Yくんの生活がこれまでどんなだったのか、私は知らない。しかし、背負いきれない程、持ちきれない程の荷物をかかえていることは分かった。わが身にひきくらべて苦笑いをさせられることもあった。他の子が荷物に一寸でもさわると、あたりに響きわたる大声を出すのだから、本人の心は安らかとは言えないだろう。どうしたら軽い気持ちになれるだろうかと、幼稚部の担任たちとしばしば話し合った。

他人の期待に対して敏感で、いろいろの能力をもっているこの子どもに対して、能力があるからと言って常識的な期待をかけることをしないで、この子にとっていま意味のあることができるように、たのしんで一日を過ごせるようにと、私共は願った。



この子どもも、子どもなりに沢山のことをかかえており、それから解放されて、いまを本当に生きることが望んでいるのだろう。どうしたらそうなるのか。簡単に答えは出ない。同じ願いをもって人生を歩む者が、保育の場で共に探究してゆくのであると思う。

人間の根源を生きる子どもと一緒に生活できるのは、ありがたいことである。

(愛育養護学校)

土づくり

小宮山 洋夫

ぼくは森川町の小道を自転車のペダルをゆっくり押して進んでいった。まだ二階建ての木造家屋がちらほら残っている。

やがて啄木が下宿していた旅館近くの造成中の児童公園にさしかかった。割烹着を着たおばさんたちが数人腰をかかめている。大きなプラスチックの漬物樽に、赤い土を入れているのである。その土は、造成中の掘り出された残土で鮮やかな赤土。公園の一隅に山をなしている。

自転車を止めておばさんたちの様子をぼんやり眺める。するとおばさんの一人から、

「タルをあげるから、土を持っていかない」と声を掛けられた。

突然の申し出に、

「えっ、えーええ」

ぼくは態度を曖昧のまま、

「どうも」

とタルを一つもらい、おばさんが渡してくれたシャ

ベルでタルの中に赤土をザクッザクッと放り込む。

「植木に使うのよ。このあたりでは土は手に入らないからね」

「ああ、そうですか。これだけ土がたくさんあれば」

ぼくは意味不明の応答をしながら土をザクッザクッと入れ続ける。なつかしいなあ、土いじりは。

頭にしたおばさんの手拭いに〇〇館の文字を見る。あ、そうか、あの旅館で働いている人たちだ。

〇〇館には、正面玄関をはさむように草木を植えた漬物樽がずらりと並んでいたな。どんな種類の植物が植えられていたか、注意して眺めたことはなかったが。

タルの中が土でいっぱいになると、ぼくはシャベルを返しながら、

「どうもありがとう」

と礼をいう。そして、タルを自転車の荷台にのせ、ここに笑っているおばさんたちを後ろに、ずれ落

ちないようタルを片手で押さえながら自転車を転がし、谷一つ隔てたアパートへ向かった。

タルをベランダに置くとタバコをふかしながら、タルの中の赤い土を眺める。

「野菜は何をつくろうか」

すでに、タルの中にシャベルで土を入れている間に、ぼくは土の利用法を決めていたのだった。敗戦直後の子ども時代、食料不足を補うために畑を手伝った土の感触が甦ったからだ。

タルの中の小さな畑にダイコンのタネをまく。発芽に成功。ハート形の子葉が開く。子葉の間から本葉が伸びる。混み合っているところを間引く。間引き葉をそのままの姿で味噌汁に放り込んで味わう。さわやかなおいしさ。自分の行為の確かな手応え。いいなあ。成長ぶりを見ながら次々と間引いていく。

「よし、三本にしぼり込もう」

残されたダイコンの葉が大きく茂る。白い根が地上に浮き上がりながらグングン太る。真横からダイコンの茂みを眺めてみる。それは森だった。

「さて、収穫するか」

ぼくは葉柄をつかむとグイッと引き抜く。予想外に長い。タルの底まで達したのか、先端が曲がっている。

尻尾を切り落とし、水でサワサワと洗い土を落とす。白い肌がまぶしい。(こんなタルの中でよく出来たなあ) ぼくは、タルの中の土の威力に圧倒されてしまう。

こうして自前の小さな畑で、ぼくの野菜づくりは始まった。

*

その後、栽培用の容器として漬物樽の他に、植木鉢、プランター、トロ箱、たんすの引出し、石油缶

など、廃品を中心にいろいろなものを使ってみた。

素焼きの植木鉢は土の乾きがはやい、プランターは二、三年で破損する、木箱はアリの巣になりやすい、石油缶は腐るなど欠点があり、けっきょくいまは、大半はトロ箱、一部プラスチックの漬物樽を利用している。

トロ箱とは魚などを入れる発泡スチロールの容器で、魚屋かスーパーなどで分けてもらっている。散歩の折、道端で拾ってくることもある。趣味の野菜づくりは廃品利用がふさわしい。トロ箱はカッターナイフで底の四隅に二センチ角の、漬物樽は金槌と五寸釘で十数箇所、排水のための穴をあける。

栽培容器を殖やす(畑を拡張する)にあたっての問題は、用土の確保だ。ゴミが溢れる都会では栽培容器の入手は簡単だが、公園でも造成しないかぎり、土を手に入れるのは難しい。道路のコンクリートをはがすわけにはいかない。スーパーや園芸店で「土」も売られている。けれども土を商品として買



「ネギとツククサ」

小宮山 洋夫・画

う気にはなれない。それに土は重いから持ち運びが大変だ。

ふと、ぼくは昔、開墾した菜園に原っぱで刈り取った草を、大量に入れ込んだことを思いだした。そうだ、落ち葉を利用すればよい。近くに原っぱはないが、大学の森はある。というわけで、新しく殖えていった栽培箱の用土の大半は、森で拾い集めた落ち葉からつくられたものだ。

まず、容器の中に落ち葉をいっぱいぎゅうぎゅう詰める。油粕を少量加え、混ぜ合わせておくこともある。その上に土を三センチばかりかぶせると、たちどころに新しい小さな畑が誕生する。そしてその土の中に、すぐさま種をまく。

野菜は発芽すると、土の層から落ち葉の層へと根をグングン伸ばしていく。あのしなやかに見える根の伸張力はものすごい。枯れているけれども形ある落ち葉を、難なく突き破る。地上の葉茎もそれに応

え背を伸ばす。

一方、箱の中ではミミズ、ムカデ、ハサミムシ、キセルガイなど、虫たちの生命活動も活発になって、これがまた落ち葉の分解を促進する。野菜の成長とともに、堆肥づくり、土づくりがすすんでいくのである。

野菜の出来は、はじめの一、二年はあまりよくない。落ち葉の分解がすすみ、箱の中がさまざまな生命で充満するようになると、野菜は次第にめざましい成長振りを見せるようになる。そうなれば、あとは栽培している野菜のクズをその都度、箱の中に戻すだけで、同じ畑で何年つくりつづけても安定した育ち方をするようになる。肥料としては粉状の油粕を少量与えている。化学肥料も鶏糞も使わない。油粕は植物の遺体である。植物の栽培には植物を当てたいということだ。もし、自分が野菜なら、そんな環境で暮らしてみたいと思う。

農薬も使わない。これまで十数年栽培してきて、病気にかかった野菜に出会ったのはトマトだけだった。野菜にとって快適な母胎で、ふつうのつくり方をすれば、野菜はなかなか病気にはならないということがわかった。

土の中の根は、水や養分を吸収しながら、呼吸している。そこでよい土とは水持ちがよく、養分を保持して、しかも水はけがよいものということになる。この一見矛盾した状態も、土の中に落ち葉や草など有機物を投入することによってつくり出すことができる。

落ち葉はたんに用土として役立つだけではない。分解がすすむと肥料としても効力を発揮するようになる。植物の成育には、ちっ素、りん酸、カリの三大要素の他、カルシウム、マグネシウム、マンガン、ほう素、鉄など多くの種類の養分が必要である。その点、それらの要素すべてを吸収して、身体

をつくり上げた植物そのものを肥料として利用するのは、自然に従った合理的方法といえよう。落ち葉や草は、もともとバランスのよい肥料なのだ。こういうものは工業的にはつくりえない。

さらに前に触れたように、有機質に富むことで、バクテリアや小動物などさまざまな種類の生物が棲息するようになる。そしてお互いを支え合う。環境が多様化することで、病気が発生しにくくなる。自然の世界では、民主主義が貫徹している。

箱の中の小さな畑にも、いろいろな種類の雑草が入り込み繁茂している。雑草は人懐っこい植物だ。ほぼ一年を通して姿を見せるのは、ホトケノザ、スズメノカタビラ。春、気温が上がると、カタバミ、メヒシバ、ツユクサ、次いでイヌタデ、スベリヒユが新芽を伸ばす。ぼくはこれらの雑草は根ごと引き

抜かないで、はさみで刈り取るように心がけている。雑草もまた、土の中の環境の複雑化に一役買っているからだ。

土づくりとは、どうやら多くの種類の生物が生きやすいよう、環境をととのえることにつぎるようだ。そのなかで野菜も元気に育っていく。

野菜づくりといっても、環境にさえ恵まれれば、野菜は植物として自分自身の力で勝手に育っていく。人や動物はそのような植物の生命過程に全面的に依存して生きるしかない。土づくりと同じように、人の出来ることは、野菜が育つ条件をととのえる作業に限られる。生物として本当の意味で自立しているのは、植物だけなのだ。

(イラストレーター)

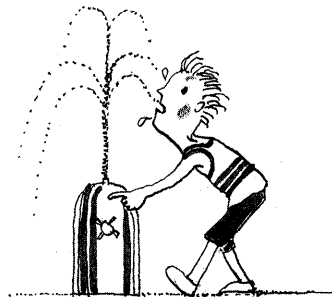
子どもたちの〈遊び場〉を考える

『子どもの遊び空間』 藤本浩之輔

『子どもとあそび—環境建築家の眼』

仙田満

小川 剛



日頃、学生たちと接していて感じられること

は、彼（女）たちは、概して自発性にとぼしく、

人付き合いがわるく、したがって交友範囲がせま

く、また日常生活での常識的なことに欠けるとこ

ろが多いことである。これには、彼（女）

たちの幼少期の生活にみられることが、影響を及

ぼしているといえよう。

このところ、受験体制の低齡化がすすみ、親の

関心は子どもの学校での成績、一流校への合格に

集中し、生活者として子どもを育てることがおろ

そかにされている。子どもたちも塾通いに時間を

奪われ、周囲から過度に競争意識をあおり立てら

れ、本当の友だちを得ることなく幼少期を過ごしてしまふ。その上、都会地では、年々、子どもの遊び場が減少し、子どもたちは「遊び」から遠ざかっていく。古くから、子どもにとって、遊びは生命だとされてきた。遊びには、時間・場所・仲間が不可欠である。しかし今、子どもたち自身、またその周囲からこれらの三条件が失われ、生命の源泉としての遊びが奪われている。そのことの一端が、今、若者たちの生活と行動に表れてきているのではないだろうか。長い目でみると、それはわが国の将来にとって由々しき事柄として表れてこよう。

子どもたちに「遊び」を取り戻すことは、現在では、容易なことでないかもしれないが、焦眉の事柄である。これをしていかなければ、創造性に富むたくましい存在としての人間は育っていかないであろう。ともかく自分たちの手でやれることから、そのことに取り組む必要がある。その際、

有力な手がかりを与えてくれるのが、つぎの二冊の本である。

①藤本浩之輔『子どもの遊び空間』NHKブックス、昭和四九年、日本放送出版協会

②仙田満『子どもとあそびー環境建築家の眼』岩波新書、一九九二年

藤本氏は教育学者であり、仙田氏は建築家である。それぞれの視座から、今日の子どもの「遊び」、とくに「遊び空間」について、豊富な体験、資料にもとづき、たいへんわかりやすく述べられている。

①は、出版年からもわかるように、経済成長・都市化の進行のなかで、大都市で子どもの遊び場が奪われはじめた時期に書かれたものであるが、今なお読みつがれているものであり、まさに「古典」といふべき地位を占めている。本書が、このような永い生命を保ちつづけることができたの

は、その問題提起が子どもの遊びと成長との関係について本質的な洞察にもとづくものであり、かつまた具体的・実践的な内容をもつものだからである。

本書では、「遊び」は「人間が生きていく上で基礎になる能力、すなわち、社会的能力、創造力、運動能力や体力を獲得し、発達させていく上できわめて重要」というとらえ方が全体のライトモチーフとなっている。そして、戸外空間、施設空間、子どもの組織について、具体的な例を通して、その問題点が指摘され、解決のための手立てが示されている。最後に、大阪市のある小学校区での状況を通して、子どもの遊び場・遊びの変化とそれに対するものとしての児童館を中心とする地域の人びとの活動による遊び空間の復元の活動が示されている。得ることの多い本である。

②は、「環境建築家として、遊び環境研究者として、そして父親として、日ごろ考えていること

を朝日新聞の日曜版に『あそびの現風景』と題して連載した」ものを中心にとめたものである。

私自身、興味深い写真とともに書かれたコラムを楽しみに読んだ記憶がある。全体的に要点をおさえた読みやすいものである。表紙に巻かれている「帯」には、

「子どもたちに未来はあるのか あそびこそが創造性をはぐくむ しかし、いま子どもたちは、あそび時間、あそび空間、あそび友だちを奪われている」

と書かれている。問題意識では①と共通している。また具体的な例を通して論をすすめるという手法にも共通性がみられる。しかし建築家という立場から問題をとらえていくことから、さまざまな事物・現象を基本的な構成要素に還元し、全体的な構図や構造を見やすくしている点で、学ぶことが多い。例えば、「あそびの原風景」として、著者自身の体験をふまえながら、多くの子どもた

ちの遊び行動についての知見にもとづき、そのあそび空間・あそび場所を、「自然スペース」「オーブンスペース」「道スペース」を中心的な空間とし、また「アナキースペース」「アジトスペース」「遊具スペース」を従の空間とする六つの原空間によって成立するものとする。そしてそれぞれを類型化した遊びと関連させて、それぞれの空間の特質と相互関係とがあきらかにされる。これは子どもの遊び空間をみていく上できわめて示唆

的である。そのほか、Ⅱ 子どもの空間、Ⅲ 世界的子ども、Ⅳ あそび環境の現在、Ⅴ 子どもと大人、という五章からできた本であるが、楽しく読めて、学ぶところの多い本である。読んで「わかる」だけでなく、「わかった」ことを仲間と力を合わせて、行動に移していただきたいと思う。期待します。

(お茶の水女子大学)

『鳥獣戯語』

福音館書店 (八五〇〇円)

皆川 美恵子

夏休みの読書にふさわしい一冊の本を御紹介しましょう。動物の物語がどっさりど盛り込まれ

た、美しい図版もたっぷり添えられた、それはお酒落でリッチな大御馳走級の本です。内容がへ

ビーだけでなく、本体の重量もありますので（五五二p、一・四三kg）、腹筋力や腕力が充分にある方でないかぎり、寝ころんで読むことはお勧めできません。では勉強机の上でと、しっかり構えたのでは野暮ったさすぎます。野暮とは無縁な、戯れ心に溢れた華麗な遊びの本なのです。

最もふさわしいのは、夏休みのけだるい昼下がり、外出するのも人と会うのも億劫な、でも何か心がうち向かう悦びを探している時、涼風の通うお気に入りの場所で、大好きなおやつを用意して、背もたれ椅子でページを繰ることではないでしょうか。贅沢な本ですから、贅沢な時間の中で読んでいただきたいと思います。

『鳥獣戯語』と題されたこの本には、日本の中世の説話を中心として、神話、昔話、詩歌、ことわざ、なぞなぞ、落語、歌謡曲などから動物に関連した物語が、二〇〇以上も集められています。まるで物語によって構成された多種多様な動物の

王国、物語による歴史動物園が浮かび上がってくるのです。

私たちの祖先が、動物の生命をどのようなものと考えていたかは、その時代その時代で、動物の物語をどのように語っているかということにつながります。ですから残されている動物の物語は、日本人が動物の生命をこのようにとらえたという生命誌による歴史なのです。この本の編集者は、これらの動物の生命の物語による歴史を、さらに読み解くという、繊細かつ大胆な試みをしています。多様性を豊かに湛えながら、日本人の動物観の歴史にせまろうという〈新しい歴史研究〉の作業を企てているのです。おびただし数の動物物語が、どのような順序で配置され、どのような側面から光があてられ、どのように構成されているか、そのことが編集者の歴史観の表明なのです。始まりは山の写真です。山に入り、山を下り、里へスポットがあてられていきます。そして東寺

の塔に住みつく鼠の物語が紹介されます。美しい色彩の御伽草子絵巻『弥兵衛鼠』の、結婚を契機とした波瀾万丈の物語。結婚、子宝、繁栄と、生命力の噴出による幸福への想像力は、人間の身近にいる小動物鼠によってになわれてきたのでした。

鼠から十二支が活躍する『十二類絵巻』という、アイルランドのチェスター・ビティ図書館所蔵の貴重な絵巻が登場します。これは十五世紀中葉の京都を中心とする、貴族文化的意味合いをもつ十二支の動物と、地方的な悪党、土民をうかがわせる野生的な動物（狸を首領とする）との合戦絵巻です。狸など境界的な異類が文化を挑発するという、動物による人間社会の擬人化でしょうが、これは人間内（動物内）だけの話ではなく、まさに人間と動物との関係そのものです。見慣れない動物は、日常生活から遠くへ追いやられなくてははいけないのです。野生の動物は、人間の世界

観では異界という闇を秘めています。しかし、この闇こそが「私」「我々」という意識の光を、光たらしめているのです。

ある動物学者の体験談ですが、泣いている二歳の孫をあやしていた時、「そんなに泣くと狸が来るよ」と言ったところ、孫は「狸さんお友だちなの」と答えたそうです。狸を悪者に仕立てられなると知った学者は、本棚から『絶滅恐竜大図鑑』を取り出し、将来、仲良しになることはないだろう翼竜の中から、最も恐ろしいプテラノドンを探し出し、泣くと天上にプテラが潜んでいてやってくる、プテラの物語作りを開始したそうです。

本題に戻りましょう。自然と文化、闇と光のつながり手である動物たちの物語が、ぞくぞくと続きます。狐、鹿、亀、鳥、梟、鷹、雀、鶯、蜘蛛、蜂、虻、ミソサザイ、そして猫の物語。

さて、終わり方に編集者の動物観・生命観が顕

著に表れています。山と里、人間と獣、文化と自然の想像力の架橋の中から誕生した、「山姥と金太郎」の物語が配置されているのです。母子説話に、文化の中の異和性の光源、生命の根源を夢想してやまないのです。

この本は、子どもにお話をする時に、お話を取り出す宝箱になることでしょう。また、自分の動物観・生命観を考えなおす手がかりにもなるでしょう。私は、鮭の話が収録されているもの、鯨、鯰、蛸、烏賊、それに魚と、海の動物の物語が少ないのが気になります。地球環境が壊され、

森や山野から動物が消え出し、海的神秘が浮上しています。巨大水族館が次々と生まれています。が、今、最も、「生」の神性を新しくするのは魚ではないでしょうか。大都市で魚たちは、海を賦活する周縁へと誘うかのように、夢想の海を泳いでいるのです。私たち日本人の祖先が山人か海人か里人か、『古事記』以前の、言葉以前の彼方へと導いてくれるのは、動物のイメージだけなのかもしれません。

(十文字学園女子短期大学)

子どもの「ごっこ」遊びを楽しみ、 理解するために

『「ごっこ」の構造—子どもの遊びの世界』

C・ガーヴェイ 高橋たまき訳 サイエンス社 一九八〇

『想像と現実―子どものふり遊びの世界―』

高橋たまき ブレーン出版 一九八六

『ごっこからファンタジーへ―子どもの想像世界―』

内田伸子 新曜社 一九八六

『子ども心と秋の空―保育のなかの遊び論―』

加用文男 ひとなる書房 一九九〇

『なぜごっこ遊び?―幼児の自己世界のめばえとイメージの育ち―』

今井和子 フレーベル館 一九九二

内田 伸子

保育の目標は、一人一人の子どもが自分で考え、工夫し、判断することができるようになること、いわゆる「自律性」を育むことにあると思われまます。保育の仕事はそのような子どもを育むに手を貸すところにあると考えられます。そのためには、子どもの発達の姿をしっかり捉え、子ども

の心の動きを瞬間瞬間、把握することが必要になると思います。

日々展開する遊びは、子どもを理解する手がかりを与えてくれるのですが、とりわけ「ごっこ遊び」とか「ふり遊び」と呼ばれる遊びは、観察していても楽しく、興味がひかれる遊びです。こ

のような遊びは、子どもの発達にとってどんな意義があるのでしょうか。ごっこ遊びを観察して楽しむだけでなく、共感的に理解し、またそれを通して子どもの育ちや心の働きを知るために、この遊びに焦点をあて、様々な面からアプローチした本のうち、ここ十年余りの間に出版され、保育の現場におられる先生方に一度は読んでいただきたい本を五点、紹介したいと思います。

ごっこ遊びでは会話の内容や声の調子にまず興味が引かれます。一番目の『「ごっこ」の構造―子どもの遊びの世界―』は、ごっこにおける会話の構造をあざやかに描き出してくれるだけでなく、ことばを手がかりに子どもの発達を捉える方法についての一種の枠組みを与えてくれます。ことばに興味のある先生方には特にお勧めしたいと思います。

二番目の『想像と現実―子どものふり遊びの世界―』は、子どもの遊びの研究者が、ふり遊びを

通して子どものイメージの形成、イマジネーションの発達を説明しています。また、ごっこ遊びの中で、現実世界とは別の虚構世界が創られるという事は、人間生活を維持し発展させ、豊かなものにする活動空間を増やすことになり、そこにごっこ遊びの意義が認められるということを、筆者の緻密な観察と考察を踏まえて描き出していきます。

三番目の『ごっこからファンタジーへ―子どもの想像世界―』は筆者のもので、推薦図書として掲げるのは多少ためらわれたのですが、ごっこ遊びと言語発達、特に、ディスコース(文章)の発達過程と関係づけ、そこに想像力や思考力がどのように絡まっているかを保育室での観察のデータや実験手法を用いて明らかにしたものです。ごっこ遊びは保育室でのお話づくりや劇づくりへと発展しうるのはなぜかについて考えるヒントが得られましょう。さらに、子どもの心の動き

を捉えながら、自律性を育むための保育者の援助のあり方についても提案しています。

四番目の『子ども心と秋の空―保育のなかの遊び論―』は、保育観察に従事してきた遊び研究に筆者が、保育観察を通して拾ったなにげないエピソードについて独特の切込み方をして、遊びのもつ意義について深い論考を展開しています。子どもの遊びの面白さについて目のさめるような指摘がたくさんなされています。

五番目の本は、優れた保育者、今井和子先生が保育しながら気になった保育事象をすくいと、記録することを通して子どもへの理解が深まっていく過程が手に取るようにわかる良書です。本書は、何気ない子ども小さな行為からごっこ遊びが発生していく過程を追うという横軸と子ども理解という縦軸を巧みに織り合わせながら、子どもの育つ姿を余すところなく生き生きと浮かび上がらせてくれます。

以上の五冊は、ごっこ遊びを対象にしながらも、扱い方の視点はそれぞれ異なりますが、いずれも、平易な文章の中で、子どもの発達を見えざる目の確かさが感じられます。また、行間には子どもの心の動きに対する著者の温かいまなざしと洞察力があふれ、保育事象の確かな捉えと分析力に裏打ちされた文章は読みごたえがあり、読むものの心をうつものと思います。

それぞれ、力点が違いますので、明らかにしたい問題に焦点をあてている本を選んでよいですが、全部を読み通し、様々な切込み方を比較することによって、ごっこ遊びへの接近の仕方についての示唆が得られるものと思います。また、ごっこについて捉え方を相互に比較することを通して、ごっこ遊びについての見方が深まり、子どもの発達の姿を捉えるための何らかのヒントが得られるのではないかと思われまます。

(お茶の水女子大学)

『政治をするサル』

『仲直り戦術』

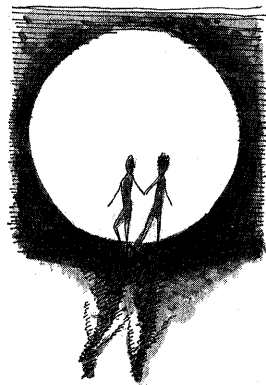
『類人猿の知恵試験』

『生物学と方法』

「私、えりちゃんの隣がいいの」。お集まりの時間に大声で宣言するあや。「へ？」といった顔のえり。そのえりの隣から頑として動かないあけみ。幼稚園に観察に行くたび、こうしたやりとりがあっけらかんで行われていることに深く感動してしまふ。そんなこと言っつて、えりちゃんがいや

と言っつたら自分は傷ついちゃうじゃないかとか、「みんな仲良く」とかはさておいて、思っていることは思っていることだものね。大人だってそんなことしょっちゅう思っている。でも口に出して言わない。へたすると思っつていることさえ気づかないようにしている。「私は大丈夫」ってひとり

柴坂 寿子



で座ってたり、気を回して席を譲ってあげたりする。

無意識にやってしまったということ、表現を避けている気持ち、認めがたい考え、たまには自分もやっているけれど、全然やっていないと信じている行い。こうしたことがほんとはあるんだと気づかせてくれる出会いは苦くもあるけれど、どこかほっとしたり笑ってしまったりする大切な体験だ。異文化の人たちとのかかわりや、「異文化としての子ども達」とのふれあいはそんな出会いの宝庫である。私は「異文化としてのお猿さん達」をそれに付け加えたい。

例えば『政治をするサル』（F・ドゥ・ヴァール著、西田利貞訳、どうぶつ社、一九八四）はオランダの動物園でのチンパンジー・コロニーの観察記録である。ここでは二十数頭のチンパンジー達が屋外の広い放飼場で自由に暮らしている。この本はその暮らしの六年間に渡る観察を、雄達の

「権力争い」の歴史を縦軸に、コロニー全体でのサル間（？）関係を横軸にまとめたものである。

同じ著者の『仲直り戦術』（F・ドゥ・ヴァール著、西田利貞・榎本知郎訳、どうぶつ社、一九九三）も前著に比べてドラマチックさはやや欠けるものの、著者が「仲直りという現象があるに違いない」という眼鏡をかけて、四種類のサルを観察する態度がおもしろい。

ケーラーは学習での「見通し」の重要性の主張や、チンパンジーの道具使用の実験で有名な心理学者である。彼の著書、『類人猿の知恵試験』（W・ケーラー著、宮孝一訳、岩波書店）は学習心理学の古典といわれる本である。しかし「学習心理学」という言葉から私達が今受けとる印象とは全く逆に、この本はチンパンジー達の行動観察記録としてのおもしろさに満ちている。手の届かないところに餌を置かれた一匹のチンパンジーが、まずケーラーにとってくれという身振りをし

て、ダメと分かると初めて棒にさわったというく
 たりなど、道具の使用という研究にこだわらない
 ケーラーの正直さが出ていて私は好きである。

「チンパンジーども」という翻訳から受ける印象
 とは裏腹に、チンパンジーの行動を述べる著者の
 気持ちは、彼らのすぐ近くにあるような気がする。
 。

チンパンジーやらゴリラやらの本を読んでいる
 うち、「お猿さんがこうだから私達もこうなん
 だ。大昔からこうで、仕方がないんだ」という思
 いに捕われるかもしれない。お猿さんで私達を説
 明しようとするわけである。それは私達がブッシ
 ュマンなどいわゆる「原始的」文化を持つ人たち
 の生活を見て陥りやすい考えと似ている。

もう少し厳密に考えて、もしかして私達人類と
 お猿さん達の共通の祖先がもっていた性質があっ
 て、それが私達が「似ている」原因と考えるな
 ら、それには他の猿ではどうなのかといった、も

う少し詳しい証拠が必要となる。これに対して、
 「私達の毎日の生活では埋もれて見えにくいこと
 をはつきりみる足場」は、もっと手軽で確実に私
 達がお猿さん達から受け取れるメッセージであ
 る。

私がこうした考え方を受け入れられるように
 なったのは『生物学と方法』（白上謙一著、河出
 書房新社、一九七二）を読んだときである。私は
 高校時代物理の授業に全然ついて行けなかった。

「光を波と考えて……」「なぜそう考えるの？」で
 詰まってしまう。その根本的な原因は「類推」と
 いう考え方が分からなかったからだと思う。白上
 さんによれば、物理学が発展する上で、大きな支
 えとなってきたのは、論理的にはなんの保証もな
 い、例えば玉突の玉を原子やら光やら途方もない
 ものとまで比較するといった類推の方法で、理論
 や観測結果ができていけると建築の足場のように跡
 かたもなくとりはらわれるのだという。いわば発

見のための方法なのである。

夏休みの間に「こうあるべき」「こうあってほしい」という考えから少し開放されて、もっと気

楽に子ども達や周りの人たち、そして自分自身ともつきあうために、私は今せっせとチンパンジーやボノボの本を周りに集めている。

(お茶の水女子大学)

『ミスエデュケーション』

— 子どもをむしろ早期教育 —

デイヴィッド・エルキンド (幾島幸子訳)

大日本図書

田代 和美



痛烈なタイトルである。早期に誤った教育を子どもに押し付けても、何の効果もないどころか、弊害さえ与えてしまうことをデータや文献の裏付けに基づいて著者は警告している。そして幼い子

どもを持つ人びとに、誤った教育の要因、子どもにおよぼされる短期的・長期的な影響、健全な幼児教育の見分け方、家庭における健全な教育の実践法を理解してもらおうというのがこの本の主旨で

ある。

教育産業はいまや花盛りである。これは学歴がものをいう日本独自の傾向ではなく、この書を読む限り、アメリカにおいてさらに激しく、その後を日本を含めた他国が追っているようである。著者は、この問題に関して親たちを非難しているのではない。子どもにとって最良のことをしてあげようと躍起になり、アメリカ国内の早期教育の流行に踊らされている親たちを生み出した背景を分析し、それに陥らないためのアドバイスをしているのである。

現在の日本の公的な幼児教育は、教育要領や保育指針に生涯の中で幼児期に育てたいことが明確に打ち出されたために、小学校のミニチュア化のような教育は行われなくなっていると思う。しかしそれが、果してどこまで親たちを納得させるものとなっているのかは疑わしい。逆に親たちの焦りを生みだし、「幼稚園では何も教えてくれ

ないから」と言っただけで子どもを塾に行かせる親もいる。もしくは英語や読み書きの指導等を看板に掲げた幼稚園に入れたがる親たちも増えているようだ。

著者は幼児に何かを教えることすべてを否定しているわけではない。知識を得ようとしている子どもにも適切な対応をするかぎり、誤った教育に陥る心配は絶対ないと述べている。「幼い子どもは、親が読み書き・算数を教えてくれるのを、ただぼんやりと待っているだけではない。子どもは自分の身のまわりの世界を探検し理解するために、莫大な時間と労力を費やしているのだ。健全な教育とは、こうした自発的な学習を助けることにはかならない。早期教育の誤りは、教えること自体にあるのではなく、教える事柄と時期が適切でないことにある。子どもがその時点で学ぶべきものを無視し、親の都合で何かを教えようとするとき、子どもは不必要な危険にさらされるのであ

る。」今の日本でもそのまま伝えたい言葉である。

誤った教育に陥らないために親たちに必要なことは、子どもがその時点で学ぶべきものの中身を理解することであろう。エルキンドは、誤った教育のもたらす弊害を分析する上で、エリクソンのパーソナリティ発達モデルが有効であると捉えた。エリクソンが、幼児期に獲得すべき課題としてあげた「信頼感」「自律心」「自発性」「勤勉さ」に「帰属感」と「有能感」という二つの課題を付け加え、このような特性を育てることこそ幼児期に必要な課題であることを説いている。「信頼感と自律心、自発性と帰属感、勤勉さと有能感——これらをしっかりと身につけた子どもは、小手先の知識や技術はふんだんに備えていても、健全な自己意識を持たない子どもよりも、よほど社会に出てからの適応力や対処能力にすぐれているのです。人生における成功は、知識や技術によって

保証されるのではなく、健全な人格によってもたらされるのです。」という言葉にそれは集約されている。「人生における成功」というのがアメリカらしい発想である。幼児期に健全な自己意識を持った子どもがいずれは社会で成功するという話は、個人的には腑に落ちないが、少しでも早くと焦っている親たちの目的が子どもを社会で成功させることであるのだから、そういう言い方は日本でも親に対して有効なのかもしれない。

しかしまた「アメリカ社会では、問題があることがはっきりすれば、何らかの対策がとられます。現在、誤った教育の要因や弊害についての社会的認識は高まりつつあります。誤った教育に警鐘をならす専門家も増えていきますし、マスコミも徐々にそうした見方を取り上げるようになってきています。」という点は、自浄能力のある社会とない社会の決定的な違いを感じる。日本はどこまでいけば気づくのだろうか。すでにマスコミも取

り上げつつある問題ではあるが、「そんなこと言っちゃって学歴社会は現実にあるのです。」という現状を強調する一言で遮られてしまいそうである。

幼児期に著者が述べたような健全な自己意識を育てることができたら、それ以後の教育がたとえ全く違う価値観で授けられたとしても、満遍なく与えられたことをこなす人間ではなく、自分の好きなこと、得意なことを選び、それを伸ばしていく人間に育っていけるだろう。それが著者のいう

人生の成功かどうかは定かではないが、少なくとも幸せな人生ではあるだろう。急げ急げの流れに乗らずに、子どもが今大切にしていること、まさに立ち向かっている課題を大切にできる大人であり、親でありたいと思う。時代が変わっても変わらずに受け継がれなくてはならないことをしっかりと見据えていくためにこの書はまさに私にとって心強い一冊である。

(お茶の水女子大学)

ベッツィ・バイヤースはいかがですか

『白鳥の夏』(掛川恭子訳 富山房)

『うちへ帰ろう』（谷口由美子訳 文研出版）

入江 礼子

ベッツィ・バイヤースは、一九六〇年代に作家活動に入ったアメリカの児童文学者です。アメリカの児童文学界で、最も権威のあるとされる「ニューベリー賞」をこれから御紹介する『白鳥の夏』で受賞したのをはじめとして、旺盛な作家活動の中で得た様々な賞は数えきれません。

彼女は一九二八年、合衆国、ノースキャロライナ州の生まれで、四人の子どもを育てながら、作家としてのキャリアを積んだ人です。作家年鑑の中で、彼女は、自分が、本の構想を、ねっている時、そういう時は、よく親指の爪をかんだりしながら、ポーッとしているのだそうです。すると、子ども達が走りよってきて、「ねえ、お母さん、

スカートのすそがほころびちゃったからおおし」とか「早くこのブラウスにアイロンかけてよ」「まだ、あの服、洗濯してくれてないの」というように、次々に、母にして欲しいことを言うてくるのだそうです。子ども達には、母が本の内容のことで頭がいっぱいだとはわからず、ただ、暇そうに見えるのでしょう。いくら、「今ね、頭の中で、お話の中味を考えているから、いそがしいのよ」といっても信じてもらえず、遂に、子ども達に、「わかった。お母さんは、洗濯がきらいなんですよ。だから、そう言っているのね。言い訳だわ。」と言われてしまったそうです。ウーム、家の中で、仕事をすることは、子ども達に、

母親は今、家にいて暇なんだなと見えてしまう分、大変なんだな……などと感心したり…。

さて、そういう時代を通じて、ずっと作家活動を続けた人ですが、キャロライナという南東部の比較的、田舎ということもあってでしょうか、彼女の小説の多くは、日々の生活の中での体験をもとにしたものが、題材に選ばれることが多いように思えます。

そんな中で、今回は、二つの読み物を御紹介しようと思います。

『白鳥の夏』（掛川恭子訳 富山房）

アメリカでは一九七〇年に出版され、日本では一九七六年に訳されました。

サラが、十四歳の夏のことです。サラの母親は、既になく、家には、ちよっぴり口うるさい叔母のウィリー、皆から美しいといわれている姉、二度の大病の末に脳に障害を持った弟のチャー

リー、それに出嫁ぎにいそがしく家のことは、叔母にまかせっきりの父親がいます。十四歳といえば、物思う季節、サラも、この例にもれず、家族がバラバラだという状態も加わって、不安感と、自信喪失の状態に陥ってしまいます。

今迄十四年間は、さして波風立たずに過ぎてきたのに、ここへきて、何もかもが、腹立たしく、そして、同時に、今迄あった自分に対する自信さえも失ってしまうのです。

姉のワンダはきれいでその上ボーイフレンドもいるのに、この私ときたら、決してきれいじゃないし、足も大きい。叔母は、いつも私におしつけがましいし、障害を持った弟のチャーリーでさえ、なんだかお荷物のように感じる。

こんな折、チャーリーが、近くに飛んで来る白鳥を見に出掛けて、行方不明になってしまいました。サラは、お友達や近所の人々と共に、チャーリーを捜し回ります。そうするうちに、彼女の心

の中でバラバラになって、くずれそうになってい
たものが、徐々に形をなし、今までの思い込みも
少しずつとけはじめます。人の心が入り込んでく
ることによって今度は、人の心にも一歩踏み込ん
で考える余裕ができたといえるでしょうか。
チャリーは、サラの崩壊する寸前の心を、偶然
の事件を通してではありましたが、くい止めるこ
とになったのです。

この本は、「家族」というものが改めて問い直
されはじめた七〇年代初頭に書かれています。こ
の本の中に出て来る父親の影の薄さなどを考える
と、今の日本の状況とも、どこか重なり合い、考
えさせられています。

『うちへ帰ろう』（谷口由美子訳 文研出
版）

日本では、あまり一般的ではないのですが、合
衆国で一般的なことの一つに、「里親制度」があ

ります。家の事情で、本当の親に育ててもらえな
い子ども達は、里親のところまで育てられます。と
ころが里親も人間、時には、いえ、しばしばその
里親と合わず、里親家庭を転々とするはめになる
子ども達もかなりいるのです。

そういう背景のもと、この本は書かれました。
原題は、『ピンボールズ』といって、パチンコ玉
のように、どこに落ちつくかわからない、その行
き先のわからなさ、不安さをあらわしています。

メイソンさんという里親のもとで、偶然育てら
れることになった三人の子ども。ハービーと、
トーマス・Jと、チャリー。それぞれに里親に出
されるまでの背景があり、メイソンさんの家で
も、最初のうちは反目ばかり。色々のぶつかりあ
い、事件を通して、三人が自分に目覚め、お互い
を認め合っていく過程がえがかれています。その
過程は決して甘いものではありませんし、「自分
で立つ」しかない、アメリカの状況もかいま見ら

れます。

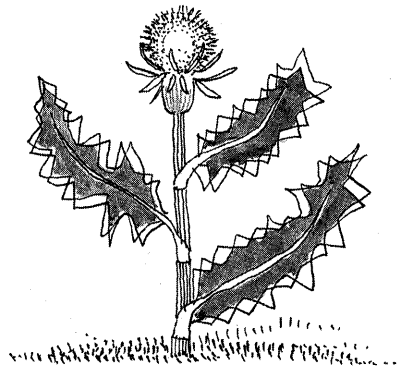
一体、何が人を人として育てるのだろうかとかと、考えさせられてしまう一冊です。

この本は、一九七七年に出版され、八三年に日本語訳が出ました。

彼女の本は、まだまだ沢山あるのですが、カニグズバークや、バージニアハミルトン、ベバリー・クリアリーののように沢山は、日本語訳がまだ出ていません。

まず、この二冊、暑い夏にひもとかれ、サラと、ハービー達に出会われることを願っています。

(母子愛育会家庭指導グループ)



新現代幼児教育研究会

第十四回オンステージのお知らせ

日時 八月二十二日(日) 講演九時三〇分

実技一時三〇分

講師 外山滋比古先生 堀合文子先生

会場 十文字学園講堂

問い合わせ ○三(三九一八)一六六八

堀合先生に学ぶ(5)

家庭人として、保育者として

立川 多恵子

人が一生をかけて、一つの仕事をやり遂げる。その位尊いことはない。今回は、堀合先生の家庭人として、保育者として生きた長い道程に触れながら、仕事・家庭との関係について考えて見たい。

♡生い立ち

先生は大正十年一月二日、東京赤坂に生まれる。大正デモクラシーの隆盛期であり、先生の生き方の

中に自由なものを感じるのはそのためかもしれないと思ったが、先生のお話では生家は二代続いた建築業であり、学校建築等を広く手がけていた祖父は家族にとって偉大な存在であり、当時の「家族制度」の厳しさも重なって、家族は戸主である祖父の許可なくしては、何も出来ない状態だった。

したがって先生が女学校に進学する際も学校選別に祖父が関与して、知人が先生をしている家から近

い「青山女学院」が選ばれた。

先生は女学校卒業後も進学を希望したが、「女が勉強して何になる」といった祖父の考え方が優先して、一時は進学を断念せざるを得ない状態だった。

クラスメートの中には津田塾や東京女子大に進む者もあり、先生の進学熱はいやが上にも上がり、それを察して母親が担任に相談して薦めてくれたのが、

女高師（現在のお茶の水女子大）の保育実習科だった。修業年数が一年だったので、母が祖父に内緒で

進学させた。したがって先生の場合は幼稚園の先生になりたいために保育実習科を選んだわけではない。

入学したのは昭和十三年四月で、前年には支那事変が勃発して、我が国としても風雲ただならぬ時代であり、公立女学校から進学してきた同級生は良妻賢母教育に徹したところがあり、大分固さを感じた。そこへいくと、私学出身の自分が、結構自由な女学校生活を送ることが出来たことを改めて感謝した。

保育実習科時代は附属幼稚園が主な学習の場であり、時間の許す限り保育に携わり、その間本校（女高師）の先生から保育、教育、心理学、音楽、図画、保健衛生等の講義を受けた。倉橋先生には保育学の講義を受けたが、当時の先生は忙しく、ゆっくりお話を伺う機会は少なかった。



◀ 女高師保育実習科卒業後（昭15年）

堀合先生は実習科時代は余り子どもが好きではなかった。保育実習も、やらなければならぬからやるといった義務的なものだったという。今回先生のお話を伺うまでは「先生はきつと子どもが大好きで、一生を保育の仕事に捧げたいと考え、保育実習科に進んだに違いない」と思っていたので、「子ども

もが余り好きではなかった」と言う先生の言葉に驚いた。すでに述べたように、何とかして進学したいと考えた先生は家庭で許されそうな学校として、女高師の保育実習科を選んだのだ。それがたまたま幼稚園の先生を育てる学校であり、保育実習が義務づけられていて、子どもと出会う機会になったわけである。

↳保育実習科を卒業して

女高師の保育実習科の学生は卒業すると、殆どが幼稚園の先生になって各地に赴任した。同級生の中で一番最初に赴任先に決まったのは、現在十文字学

園女子短大付属幼稚園の教頭職にある桑原先生であり、十九歳で青森女子師範附属幼稚園に主任として赴任している。当時の保育実習科の学生は卒業後直ちに地方の公立幼稚園の主任になって赴任することも珍しいことではなかった。

その頃の日本は世界の中で孤立化して、開戦も時々の問題になっていた。堀合先生の家はすでに祖父母が隠居して他所に移り、両親と兄弟だけの家庭になっていたので、学校から横浜元町幼稚園を紹介されても通勤が不便だという理由で辞退し、卒業後、更に進学のための勉強を始め、長い間の希望を果たすため、翌年女高師の理科を受験した。しかし残念なことに結果は首尾よくいかなかった。

丁度その頃女高師の附属幼稚園では先生が一人産休に入ったため、恩師から先生に「是非来てくれなにか」という誘いがあり、早速一月から臨時の形で附属幼稚園に勤務することになった。先生が附属幼稚園に正式に赴任したのは、昭和十六年四月からで

あり、この時の恩師の誘いが堀合先生の長い保育者生活のスタートになったわけである。その年の十二月に、日本は米国と戦争状態に入っている。

当時の保育について先生は「あの頃は集めてやらなければならぬことが必ずあり、それに馴れるまで、一生懸命でした」と語っている。先生が初めて保育者になった当時、子どもを集めて指導したという保育内容は、絵を描くこと、歌うこと、おゆうぎ、お話などで、毎日一つか二つではあったが集めて計画的に指導していた。しかし「作ること」だけはその当時から自由な遊びの中で行われていた。

戦争が激しくなると、東京は敵機に狙われ、園児たちは登園しても警戒警報のサイレンが鳴ると、すぐ降園させなければならぬ日が多くなった。その頃の附属幼稚園の先生方は子どもを帰宅させると、早速シャベルを持って穴掘りをして自分達の手で防空壕を作った。本土空襲が頻繁になると、子どもを帰宅させる余裕もなくなり、子どもと一緒に先生た

ちの手作りの防空壕に体を寄せ合って入る日が多くなったと言う。やがて子どもたちは次々に地方に疎開し始め、東京に残る子どもの数が少なくなると、附属幼稚園も終戦までの半年余りを休園した。そのため先生は本校の学生の勤労働員先に行く準備を始めたが昭和二十年八月の終戦を迎えた。

戦争が終わって、二か月後、附属幼稚園は再開された。附属幼稚園の再開は「隣保幼稚園として、近所の子を集めての再開」であり、ご近所幼稚園としての発足だった。

戦前の附属幼稚園は遠方から付添いの人に送られてくる子どももあり、一種のエリート幼稚園だったが、再開間もない時期には近所の子を集めての出発だったわけである。しばらくすると、地方に疎開していた子どもたちも帰ってきて、両者が一緒になって園生活を送ることになる。

敗戦によって日本の学校制度が大幅に改革され、戦後は幼稚園も学校制度の中に組み入れられること

になる。したがって保母の再教育のために各地で認定講習が始まった。堀合先生もこの講習を受けるため熱心に通い、この時、講師の倉橋先生から改めて保育を学んだ。先生はその後になって自分の保育実践に疑問を感じると、その認定講習での倉橋先生の講義ノートを開き、確かめたり、考えたりした。そのため先生の講義ノートは鉛筆で書いた字がこすれてしまっ、すっかり真っ黒になったと言う（もともと当時のノートは紙質が悪く、鉛筆の芯もざらざらしていた……）。

△先生の結婚

長い混乱の時代が続いた戦後、先生は縁あって、エンジニアの御主人と結婚した。戦後何年も経っていない時期なので、「よい方がみつかりましたね」と話すと、先生も率直に「そうなんです。私の年頃の女の方は、相手が戦死したりして、配偶者探しが大変だったのです。結婚できたのは幸いだったかも

しれません」と笑っていた。したがって先生が長男を生んだのは、三十代になってからである。

子育ては同居していた先生の母親が手伝ってくれ

◀ お店やさんごっこ（昭27年）



たので、産休もそこに仕事を続けることができ
た。先生はわが子を育てながら、そのエネルギーの
大きさに驚き、園でも子どもがもっと自由に遊べる

◀ お茶大附属幼稚園の先生方と（昭28年）



ことを願った。ある日クラスの子どもと一緒に遊び
回ってジャングルジムに上がって見たら、園庭は先
生のクラスの子どもだけになっているのに驚いたと
いう。

私が初めて先生の保育を見たのは児童学科の学生
時代だったが、二十年前、保育者養成の仕事に従事
して、久しぶりで先生の保育を見たことがある。そ
の日先生はホールに子どもを集めて、スキップなど
をさせていた。私は当時の附属幼稚園の園長先生に
「リズム的なものは集めて指導するのですか」と聞
いた。園長先生は「その方が能率がいいからです
よ」と答えた。この言葉はその後長く疑問として
私の耳に残っていたが、まもなく附属幼稚園ではリ
ズムも子どもをホールに集めて指導することはなく
なった。今回、先生にその頃のことを思い出して質
問したら、先生は「そうなんです。その頃、私もい
ろいろ考えていたのです。だってリズムだけは集め
てやらなければならない」ということはないでしょ

う。ブランコする時でも、リズム的なことはいろいろ経験できるので「もの」という。先生はこうして長い時間をかけ、園生活での子どもたちの自由を保障していったと考える。

先生に子どもたちのエネルギーの大きさを知らせた長男は大学を出ると、浜松に本社のある楽器のメーカーに就職し、結婚して、現在二人の子どもの父親になっている。したがって保育の場では仕事オンラインの若々しい先生も休みになると、浜松まで孫の顔を見に行く優しいおばあちゃんである。

↳若さを保持する

私は堀合先生の保育しているのを見てもしばしば若いこと、動きが軽やかなのに感心する。その秘密がどこにあるのか是非知りたいと思っていたが、先生の友達の人から「堀合さんは日本舞踊の名取よ」という話を聞いて「なるほど」と思ったことがある。

その時、私は先生が東京出身の人と知っていたので、きつと小さい時から日本舞踊の稽古をしていたためだろうと考えていたが、今回このことについて改めて何うと、五十歳になってから民謡を踊ることから入ったという。動機は、先生の恩師であり、長くお茶の水女子大で学校ダンスを指導していた戸倉ハル先生と一緒に、よく幼稚園の先生の講習会でおゆうぎを教えていたが、その折、戸倉先生が学生たちと楽しそうにダンスを踊るのを見て、すっかりあこがれてしまい、自分も何らかの形で大人の踊りが踊れるようになりたいと考えたのである。

たまたま先生の家の近くに花柳徳兵衛の道場があったのを幸いに、その講習に夜通ったが、徳兵衛先生はまもなく亡くなられ、やがて道場が閉鎖されると、高弟の開いた中野や、八王子の稽古場に通い、本格的に花柳流門下に入門し、仕事の合間を見て熱心に稽古に励んだ。その結果先生は三年で名取になっている。

先生は恩師へのあこがれから、ある時はバレエの稽古もやってみたが、年齢を考えて、日本舞踊に力を入れることにした。高年齢になってからの入門であり、本格的な日本舞踊を始めるには、多少の躊躇があったので、民謡を踊ることから始めたわけだが、今ではすっかり日本舞踊の面白さに魅了され、時折舞台に立つこともある。

先生が日本舞踊に打ち込んだことが、若さを維持する原動力になっているとしたら、こんなに嬉しいことはない。「保育者は体を動かすことを苦にしない」この言葉は先生の口癖であるが、保育の場に見られる先生のリズムカルな動きが日本舞踊を学ぶことによっても保持されているとしたら、先生の趣味が保育者としての長命を支えていることになる。

まとめ

人はこの世に生を受けて、自分の力を十分生かすことの出来る仕事に出会えることほど幸せなことは

ないだろう。堀会先生の場合それが保育の仕事であったと考えられる。

先生は何時でも人生に前向きに進んでいるが、無理はしていない。どちらかというと、与えられた場で、地味な努力をしている。それが先生の生活姿勢でもある。その生活姿勢が先生をして懸命に保育の道を歩ませたのではないかと考える。

先生は仕事と家庭を両立させた。例えば仕事と家庭を両立させていても、多忙な余り大人本位の能率主義をとる人もいる。しかし先生は家庭でも、仕事でも、対象に忠実なるがゆえに、子どもから学ぶ姿勢を忘れていない。その結果先生の保育の道は倉橋先生が主張する子ども側に立つ保育を実現するための長い道程にもなった。

(十文字学園女子短期大学)

い動きをして、自分もまわりもとまどいます。

『英語の教科書は読めますが、英会話はできません』の保育バージョンといったところです。

しかしまあ、こうして書いてみると、我ながら、よくも辞めないで続けてきたものだ……。

バルセロナオリンピックの後の五歳児二学期始業式。「先生、岩崎恭子ちゃんが金メダルとったんだよね!」と時代に敏感な我がクラス。当然のごとく、三学期始業式の話は、『皇太子様と雅子さんの御婚約』でした。「婚約したんだよね」「よかったね」「先生はしないの?」の声の中、「さて、ここで問題です。皇太子様のお名前は何でしょう?」とふざけて聞いてみると……、S君が自信満々で答えました。「知ってる! ブッシュ大統領!!」「!?」私、思わずうけてしまったのですが、さらにH君が「ちがうよ。皇太子様だよ!」とたたみかけてくるので、ますます笑いが止まらなくなって困ってしまい

ました。結局、Rちゃんが、「浩宮さま?」と言ったところで、皆「ふーん」と落ち着いたのですが、一見わかったようなことを言う子ども達も、聞いたことをそのまま話しているだけで、本当に理解しているかどうかは、いつも『?』マークなのでしょうね。

あれ!? それは私も同じような……!?

四歳児クラスを担当している時のこと。園庭で落ち葉焚きをして、やきいもを食べようということになりました。丸太を組んで、何日もかけて集めた落ち葉を燃やして、灰の中にさつまいもをほうりこんで、後は出来るのを待つばかり……。ところが、なかなか出来上がりません。打ち合わせでは、お弁当の前に食べられるはずだったのに、急遽、先にお弁当の用意をすることになりました。状況にあわせて、臨機応変に判断した。ただそれだけのことでした。でも、その時の私にとっては、たったそれ

だけのことが、実にたいしたことだったのです。

何しろ、園全体で『お弁当の前に食べる』と打ち合わせた以上は、必ずやきいもを食べてからお弁当の支度になるはずだと思ひ込んでいたので、それ以外の選択肢が自分の中にはありません。普段ならば、遊びも一段落して、「先生、おなががすいてきたね」と子ども達が言い出す頃になっても、一生懸命遊びを盛り上げていたのです。しかも、「もうすぐやきいもが食べられるわね。楽しみね。」と、子ども達の期待感も煽るだけ煽っていたものですから、今さら「先にお弁当に……。」と言われても、自分が方向転換できないのです。それでも何とか気をとり直して、「片付けて、先にお弁当にしましょう。」と声をかけ始めるのですが、今の今まで言っていたことと180度違うことを急に言い出すのです。子ども達だって反応しきれません。実際にお弁当を食べ始めるまでには、途方もなく時間がかかりました。

結局、お弁当を食べ始めてすぐに、やきいもは出

来上がり、子ども達は大喜びでやきいもとお弁当を

食べたのですが、私は一人素直に喜ばません。「この子ども達にとって、幼稚園で、こんなに大きな落ち葉焚きをして、その場で皆でやきいもを食べるなんてことは、とても楽しみなことで、絶対に、もっとゆったりとした雰囲気の中で経験してほしいかたに……。こんなにバタバタと落ち着きなく動きまわるつもりなかったのに……。どうして心おだやかに対応できないのだろう……。融通がきかないのかしら……。。」などと考え始めると、その場で気分が滅入ってきます。実際には、子ども達は自分自身の力で、その経験を受け止めているのに、自分の理想通りに事が運ばなかったという、私自身の自分勝手な挫折感に心をうばわれているのです。しかも、そんな事ばかり考えて、しかめっ面で子ども達の前にいる自分がいよいよ不愉快に思われて、どうしようもない気分になってしまいます。仕方なく、トイレの個室にこもること三分間。何とか気を落ち着け

て保育室にもどりました。

保育室では、子ども達が「先生、お弁当食べないの?」「どこに行ってきたの?」と聞いてきます。

「お手洗いに行ってきたの」「先生、目、まっ赤」

「うん、煙たかったわね。今日……」などというやりとりのなかで、Fちゃんが、「先生、ここ座んなよ」と声をかけてきました。「ここ空いているよ」「座ったら……」と他の子達もさそってくれます。

「ありがとう」とその席に座りながら、私は内心驚いていました。今まで生きてきて、こんな風にやさしくていたわりに満ちた言葉を私は、誰かにかけていたことがあったっけ!?

いつもは、うるさいくらいに「先生、ここ座って!」「こっち来て!」と言う子ども達なのに、どうして、その日に限って「ここ座んなよ」だったのでしょうか。理由は、今でもわかりませんし、もしかしたら、たいした意味があつて言った言葉ではないのかもしれない。でも、その時の私にとって、

一番必要で、しかも、心に染み入るような暖かさを持っていたのは、まさにその一言だったのです。

私達は、同じ国の人間で、日本語という同じ言葉を使って、コミュニケーションをとっています。けれども、その使い方は、十人十色それぞれで、決して同じではありません。○○なつもりで言った言葉が、××に聞えることが沢山あるのです。相手のためを思い、助けになりたいと思っていてさえも、よかれと思ひ発した言葉が裏目に出してしまうことの方が多いのが現実です。大人になるにしたがつて、「どうすれば、相手に上手く伝わるだろうか」「こういう言い方をしたら、どう思われるだろうか」ということに、心を砕くようになります。おそらくそれは、人として、大切な成長のひとつでしょう。しかし、時にそれは、技術的な面にばかり片寄つて、「何のために」という発信源が見失われてしまうことがあるのではないのでしょうか。少なくとも私は、

時に見失ってしまうのです。

まだ、ひとつひとつの言葉を理解して、使いこなしていない子ども達です。ふと口をつけて出た言葉がどんな意味を持つのかは、本人も把握していません。しかし、だからこそ、何気ない一言が、その人自身を実感させて、ひどく心をゆらすのです。そして、まだ生まれて五年程度の人間が、ほとんど無意識的に、自分の何倍も生きている人間を励ましてしまうことの不思議さを思う時、自分の中の『上手くやってやろう』的な気負いが消えていくのです。

大事なものは、子どもがちゃんと持っていて、大人は宝探しをしているみたい。宝物が沢山みつけれられたら、きっと、子どもも大人もうれしいだろうな、と思います。

この三年間は、私にとって、とても貴重なものでした。自分の中の嫌なところを、素直に認められるようになってきました。「さっきはごめんなさい」

と言えるようになったのは、むしろ、私の方でした。そのうち、普通に話している自分の言葉が、誰かをいたわり得るような、包みこめるようなやさしさを持つようにならなくなっていったらいいなあ……と
思っています。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



デカルコマニー

松井 とし

入園した四歳児が園生活になじみ始めた頃、よく一緒にデカルコマニーをした。何色も用意した、美しい透明水彩の絵の具をたっぷりと筆にふくませ、真っ白い画用紙の上にポタッと落とす。次々いろいろな色を置いて、画用紙を二つ折にする。

そしてゆっくり開くと、そこには思いもよらない美しい模様が現れる。作った子ども自身にも、まわりの子どもたちにも、もちろん私にも全く予想のつかない思いがけないものが出現する。この『思いもかけないこと』が大きな意味をもつのであり、その楽しみにみんなワクワクしたものだ。子どもたちは熱中して、何枚も何枚も繰り返し楽しんだが、当然のことながら、そのたびに違った模様がうみ出され、いつも感心させられた。

創り出す喜びの後「私が作ったのパンダみたい」等と、ロールシャッハの図版のように

いろいろな形に見立てて、話はずんだこともあった。

表面的にはこのような子どもたちの姿であったが、しかし、本当の意味は別のところにあったのだと思っている。

子どもたちは美しいものを創り出した成就感や自己の存在感を感じ、そしてそれらは集団の中で、自分を表すことの自信につながったことと思う。さらに『自分も友だちも一人ひとり、みんな違うのだ』ということの認識の芽生えを、おぼろげながら感じていたのはなかったかと思う。

一方保育者としての経験を重ねていた私にとっての意義は、この活動が日常性を超えて思いがけない、新鮮な驚きと、澄んだ瞳で一人ひとりの子どもに対する機会となっていたことであった。「すてきね」とか「きれいなね」とかいった表面的な言葉ではなく、心からの感動や思いを一人ひとりの子どもたちに合った言葉で伝えることは、真の人間関係の親しみを増すことになったと思われるのである。

デカルコマニーは、入園間もない子どもたちが自信をもって自分を表し、友だちを認め合い、幼稚園の生活を切り開いていく過程において、意味のある活動であったと思う。

(元・幼稚園教諭)

ある日の育児日記から

(32)

佐藤 和代



有は一歳二か月。ようやく歩きはじめ、カタコト(らしきもの)も出てきました。

今、家族の関心は、ひたすら、有が最初に誰を呼ぶかにあります。まなんて、自分のことを呼ばせたくて「けいちゃん。言ってごらん、けいちゃん!」としつこいことしつこいこと。

でも、今のところ有が一番多く発する言葉は、「はい」でしょうか。「ゆうくん、しんぶん、おとうさんに、ハイして」と言うと「はい」と渡します。「さとうゆうくん」と呼ぶと「はい」。

この、片手をあげて、「はい」と言う姿がかわ

いくて、みんなしょっちゅう「さとうゆうくん」と呼びかけるので、

最近では迷惑そうにしています。

ともあれ、子どもが一番かわいい時期って、

しゃべり出す少し前、ああ言ったこう言ったと喜んでいられる時ではないかと思えます。夫婦げんかしていても、親子げんかしていても、有がひとこと「たー」と言うだけで、もう空気が違ってしまふ。「今、けいのこと呼んだ!」「ちがう、お母



有が歩いたのかられてく
皆に訂正されるまで

さんのことよ」「お父さんじゃないか?」
「一家にひとり、一歳児」
——なんて標語つくってました友人たちにあきれられている私です。

婦人宣教師、ミセス・プラインの
「おばあちゃんの手紙」(9)

～アメリカン・ミッション・ホームの
創立者の一人～

小林 恵子

十七

横浜 一八七三年五月十六日

私の愛している若いお友だちへ

海の向こうの日本の子どもたちのために沢山の贈物を送ってくれたアメリカの子どもたち―故郷の親切で器用な指をした皆さんたち―きつと私たちのバザーの「子どもたちのテンプル」について、知らせて欲しいと思っていることでしょうね。あなたたちの贈物はみな無事につきました。ありがとう。あなたたちが小さな手で作ってくれた沢山の可愛くて役に立つ贈物の数々を見て私たちはお薬を飲んだように元気づけられましたよ。皆さんもこれを聞いてきつと喜んでくれることでしょう。私はいろいろと苦労して、これらの品々をこのホームの小さな女の子たちに見せました。そしてこれらの贈物は遠く離れたアメリカの子どもたちが自分のお小遣いを貯金し、時間をかけて作ってくれた品物だという事を理解させました。アメリカの子どもたちがあなたたちを愛し、みんなが楽しくホームで生活できるよう

に、イエス様とその愛について学ぶことができるように、お手伝いしたいと思っっているからだと話しました。

私たちは小さな子どもたちの手で作ったと思われる品物をみんな集め、バザーの長いテーブルの真中に並べました。愛くるしい沢山の人形たち、着ている洋服や小さな寝台など、何て可愛いのでしょうか！どれもこれもみな、子どもたちが大好きなものばかりです。それから私たちはこの女の子たちにこの可愛い品物を売らせましたがその事が子どもたちをととても喜ばせました。その喜びようはあなたたちが想像できないほどだったのですよ。私たちのホームには大勢の子どもがいますので、品物売るのは順番にさせるようにきめ、大きな子どもたちのそばの椅子に一番小さい子どもたちを立たせました。

ミス・ガスリー（註一）は子どもたちみんなにいろいろ指図したり、お客さまに私たちの子どもがきれいに見えるように一番よい服を着せるなど忙しく立ち働きました。アメリカでもお母さんたちはそう

するでしょう。

子どもたちが売る順番は次のようなものでした。

* ミニー (Minnie) ソノ (Sono) ファニー

(Fannie) フニー (Annie)

* サケ (Sake) ベッシー (Bessie) メブリー

(Mary) ハンナ (Hanna) ニナ (Nina)

* ジェニー (Jennie) イロ (Ilo) カイ (Kai)

ハル (Haru)

それに幼いマーベル (Mabel) マミー (Mamie)

それからキク (Kiku) マギー (Maggie) ヤス

(Yasu) シエ (Sie) の順番でした。バザーの三

日間毎日午後からでしたが、私たちの子どもたちはあなたたちが想像する以上に幸せなひとときを過

ごしました。

私はバザーの品物を買いに来た女の人たちに私たちのホームと学生についてもっとよく理解して貰えたと信じています。もし、私たちがこの様なバザーをまた開く事ができたら、この人たちは前よりもっと私たちを喜んで助けてくれるに違いありません。

この人たちは、ホームの子どもたちがここで暮らすことがどこに在るよりも幸せなことが判ったのですから。おわかりのように皆さんたちはお金や品物を送って下さることで、私たちが部屋数のある広い建物を買えた事やホームに入りたがっている子どもたちを受け入れることができただけでなく、ホームの小さい子どもたちに今まで経験したことのない素晴らしい三日間を与えて下さったのですよ。

神様があなたたち一人一人を祝福して下さいますように、そして私たちの家族全部が神の子となれるように熱心に祈ることができるようになって下さいますように。

あなたたちの愛するお友だち ミセス・プライン

*

十九

横浜 一八七四年一月四日

愛する子ども達へ

私たちの楽しかったクリスマスへの思い出がまだ鮮明に残っているうちに私は一年前のバザーに可愛い贈物を沢山送ってくださった親切な友だち、とりわけ小さな子どもたちにお話をしたいと思います。一年前といえば子どもたちにとってはとても長いことでしょうし、自分たちが作った贈物についてあれから何も聞かないと思っているでしょうね。でも皆さんたちの贈物がクリスマス・イブに私たちの学校の可愛い子どもたちや少女たちを与えてくれた幸せについて私はあなたたちにお話することが一杯あるのですよ。

私たちが今年のクリスマスツリーについて相談し始めた時、どうしたらよいか本当に困ってしまいました。アメリカからインドの子どもたちには品物が送られたようですが私たちには品物を送る約束をしてくれる人が誰もいなかったのです。去年、私たちを援助してくれた船員さんたちの多くは帰ってしまったし、それに幾つかの理由があつてこの土地の人々には頼めないのです。そこで私たちはどう

やってクリスマスの品物を手にいれたらよいか困ってしまつたのです。学校も人数が増えてきたので私たち婦人宣教師がその費用を負担するのも難しいことでした。そのときふと私の心に浮かんだのがバザーの後に残つた品物の入つた幾つかの箱のことでした。あれはいつかもつと品物が増えたときに又バザーをしたらと思つて大切にしまつておいたのですよ。私たちはそれについて話しあつてこの品物を送つてくれた子どもたちもこうした目的のためにふさわしい品物があれば使つて貰う方が嬉しいのじゃないかしらという結論に達したのです。そこで品物を調べてみると驚いたことにまるでクリスマスのために作ったみたいにびつたりした物が沢山あつて大喜びしました。おかげで私たちの子どもたちはアメリカの子どもたちと同じように素敵なクリスマスツリーと楽しいクリスマスを持つことができたのですよ。

子どもはみんな利口で好奇心が強いものなのです。私たちが準備している或る部屋のドアが開くと

びに沢山の可愛い頭がのぞきこむのよ。そして包み紙や包んだ物が見えるよ。あ、あ、あ、このうたと話してあつて居るのですよ。こういう事になると日本の小さい女の子たちもアメリカの子どもと同じです。日本の子どもたちはしゃべつたり自分勝手な事をしたりはしないけれどやっぱ好奇心は強いよ。ミス・クロスビーは教室の飾り付けを受けもつて、大勢の女の子に緑の葉っぱで花輪を作りそれを厚紙に縫いつけるように頼みました。それはあなたたちも知つて居るよ。大変な仕事で皆はとても忙しくなりましたが、本当によくやつてくれました。多くの人たちがこんなに可愛らしい部屋を見たことがないと言つてくれました。

あつ、一寸先を急ぎすぎました。すこし話を戻して女の子たちや小さい子どもたちが楽しい事をしたのをお話ししましょうね。それはポップコーンを糸でクリスマスツリーにつりさげたことです。日本の子どもたちはこんなもの見たことがなかったので面白がつて大喜びしたのよ。そのポップコーンが私に

とつて最高に良かったのはそれが私たちのお煙で育つたものだったからなの。カブロン將軍がその種を幾らか下さったとき、私はこれが育つたらどんなに楽しいだらうと思つて畑に蒔いておいたんです。そして思つたとおりそれが今こうして私たちを楽しませることになったのよ。それから私たちは蚊帳を使つて大きな袋を作り、その中にポップコーンや日本の飴を入れて子どもの数だけクリスマスツリーにつりさげました。

こうしてやつとクリスマスツリーの準備がすっかり出来上がりました。もし、アメリカのお友だちが子どもたち一人一人に配られた贈物や用意したケーキや果物などを貰つた沢山の子どもたちの嬉しそうな顔々を見ることができたらどんなにいいでしょう。きつとみんなはバザーの残り物がそんなに沢山あつてよかつたと喜ぶだけでなく、来年はクリスマスに贈物をして皆を助けよう”と言つてくれるのではないかしら。それこそ私たちが皆さんにして欲しいことなのです。なぜかというとな誰かが私たちを助

けて下さらないとこのような楽しみを持つことが出来ないのですから。私たちを助けてくれた或る少女のお話をしましょう。この少女はアルバニーに住んでいてよく私に手紙や贈物を送つてくれるのです。そしてとうとうある時、お父さんの庭で市を開いてくれました。そして彼女の小さな弟や妹も手伝つてくれて楽しい時をもつただけでなく十六ドルのお金を集め、子どもたちのために使つて下さい”と私に送つてくれたのですよ。

あなた達が愛しているお友だち ミセス・ブライン

*

二十

横浜 一八七四年二月十八日

愛する孫たちへ

今日もまた、おばあちゃんはアメリカの可愛い孫たちにお話をしたいと思います。何て私はあなたたちとお話しするのが好きなんですよ。この小さ

な机の前に腰かけて紙にむかっておしゃべりしたことが太平洋を渡って行って貴方たちにこの手紙を読んで貰えるなんて本当に素晴らしいことだと思いません。でもただ一つ残念なのは、この「おしゃべり」が一方通行になるんじゃないかという事です。私はあなたたちの声を聞くことができないから、皆がどんなことを考えているのか、どんなふうに時間を過ごしているのか聞くことができないのですよ。でも、時々はおなたたちからおばあちゃんへの手紙を貰って、それを読むと私は手紙をだした甲斐があったと幸せな気持ちになるのですよ。

さて、私のお話をしましょうね。それは私たちの小さな女の子の一人のお話です。あなたたちにそれが誰か言い当てて貰いましょうかね。この子のことはこれまで何度も書きましたから誰のことか当てるのはそんなに難しくないと思いますよ。

この子のお父さんはスコットランドの出身で大酒飲みです。医者には彼にお酒をやめないと間もなく死んでしまうだろうと言うのです。私はその人に死ん

だ後、彼の小さな女の子が困らないように遺言書を書いておいてくれるように頼みました。でも彼は自分がそんなに危ないなど思っていないくてこの子のために何もしてくれようと思いません。

彼は今のところはお金持ちですが、もし遺言書を残さずに死んでしまったら、この子の母親は日本人ですからこの小さな女の子は何も貰えないことになってしまいます。そして貧しい子どもとして人々の情けに頼って生きていくより仕方がなくなるでしょう。

先月、彼は病気がひどくなって自分の幼い娘に会いに来てほしいと頼んで来ました。私はたとえ一晩でもそんなひどい状態の父親と一緒にこの小さな子が過ごすのはどうかと思ったのですが断れませんでした。

この子がホームに帰って二週間ほどになりますが父親からは何の音沙汰もありませんでした。そこで私は父親のかかっている医者に会って彼の具合はどうなのかと尋ね、小さな娘が一文なしで残されない

ように彼に遺言書を書くようにしむけて貰えないかと頼みました。

その医者はできるだけのことをやってみましよう
と約束してくれましたが「でも、彼は今すぐ死ぬよ
うなことはありませんよ。彼はお酒を飲むのを止め
たのですから。彼はずいぶん変わったようですよ」
と言いました。

私はこれを聞いてたいへん喜びましたがこの手紙
を書いている一日か二日前までどうしてそうなった
か知りませんでした。この女の子がまた父親に会い
に行くことになって準備をして待っている間にこの
子は歌を歌い始めました。「There is a happy
land」(あまつみくには いとたのし 讚美歌

四九〇番) 私が「お父さんのところへ行ったらこの
歌を歌ってあげてね。そして天国に行きたくない
かって尋ねてあげてね」と言いました。「ええ、お
父さんにイエス様を愛さないと天国へは行けないわ
よって言うの」とこの子は言いました。それから一
寸間をおいて「この間、お父さんの家へ行ったとき

私、イエス様にお祈りしなきゃだめよって言った
の。そしたらお父さんがそうするって言ったのよ」
「お父さんのために歌ってあげたの？」と私は聞
きました。「ええ、そうよ。歌を歌って、お祈りし
てあげたの。それからお父さんにもお祈りをして



貰ったのよ」

お医者さまが彼が変わったと話したこと、この秘密はこれだったのですよ。この可愛い子ども影響で罪深い父親がより清らかで良い生活にひきあげられたのも神の力でなくてなんでしょう。それが証明されることを望みます。そして私たちも共に喜び神を讃めたいと思います。

今、私はちょっと子どもたちから頼まれてしまいました。それなんだと思いますか？ 私がこうして手紙を書いているとドアをやさしくノックする音が聞こえました。私が「どうぞ」と言うとドアが開いて五人の小さな顔がのぞきこみました。みんな、とても嬉しそうな顔をしています。一人の子どもが言いました。「ミセス・プライン、私たち、お昼からお茶会ごっこをしてもいい？」もう、あなたたちにもわかるわね。お茶会というのは、お母さんが子どもたちのために用意してくれる小さなお皿、ケーキ、木の実などすべて良い物のことよ。本当は今日の午後は静かに手紙を書きたかったですけれど、

この可愛い子どもたちの顔には負けてしまいますね。そこで、芝生の一方の側の低い木々の間に日本式のテーブルと竹製の腰かけを用意し、小さなお盆の上にクラッカーや葡萄、栗などを並べました。そして、今、十六人の幸せな子どもたちがこの素敵な場所でお茶会ごっこをしているのですよ。こういうことで時間がなくなってしまったので私の手紙はこれでおしまいにしなければなりません。

みんなに愛をこめて おばあちゃん

最初の二つの手紙は故郷ニューヨーク州アルバニーの教会の日曜学校の子どもたちにあてて書かれたもの。故国の子どもの手作りの贈物―愛くるしい人形や洋服など、沢山入った箱々を手にしてどんなにか元気づけられ、二度にわたって役にたったという手紙。これらの贈物でバザーを開いてホームの子どもたちが大喜びした姿が目に見えるようである。売る順番をきめた子ども名

前をみると、ソノ、ハルなど日本名の子とメアリー、ジェニーなど外国名をつけている子がいて、他にサケ、イロなど名前の読み方がはっきりしない子どもがいる。

ここでは十九人の名前があげられている。当時は日本からの経済的援助は頼めなかったようで、クリスマスを祝うにしてもそのやりくりは大変だったことが理解される。こうしたなかで、子どもたちに楽しい経験を与える事をこんなに大切に考え、創意工夫をこらした。ブラインたちは何と賢く心のあたたかな人々だったろう。

最後の手紙は大酒飲みで病気のスコットランドの父親が幼い娘の信仰によって変わっていく実話を書いたもの。ブラインはこうした幼い子どもによって教えられ勇気づけられており、ホームの子どもを我が子のように愛して育てていた事がこれらの手紙から読みとれる。

(国立音楽大学)

一八三八年、ペンシルヴェニア州生まれ。ブラインたちと同じ米国婦人一致外国伝道協会から派遣された婦人宣教師。インドで宣教に従事していたが健康を書し一八七二(明治五)年、帰米の途中このホームに滞在し混血児の世話にあたった。彼女はお話が上手でよい声で歌を教えたという。(「横浜共立学園の120年」写真参照)

一八七八(明治十二)年帰国。再び日本へ婦人宣教師として来日の途上、一八八〇年五月十五日、サンフランシスコで病没した。このとき、インドで共に働いた親友ミス・ブリテンが彼女の志を継いで来日。一八八〇(明治十三)年十月二十八日、横浜にブリテン女学校(現・成美学園)および幼稚園を創立した。興味ぶかいことに、その建物はブラインたちが最初に使用した横浜四十八番館であった。私立幼稚園としては同年四月に創立された桜井女学校付属幼稚園に次ぐ先駆的なもので、フェリス女学校卒業生で東京女子師範学校保姆科を卒業した原田良子が保育者としてその任にあたった。

長い夏休み、いかがお過ごしでしょうか。研究会、旅行、読書など、たっぷり充電される方、普段は仕事に忙しいのでこの機会に、お子さんとコミュニケーションをとってお考えの御さん先生も多いのではないかと思います。

私はといえば、この月刊誌の仕事は、毎月きちんとメ切があり、お盆もお正月もありません。メ切の合間をぬって、家族旅行などを楽しんでいきます。我家の恒例の行事はキャンプです。一三〇〇CCの小型車にテントや家財道具を積みこんで、気軽に出発します。最近はおートキャンプも盛んで、まるで分譲地のように整備されたキャンプ場もあるようですが、我家はそういう所ではなく、もっぱら予約なしで行ける川原とか、簡単な施設を利用してします。

昨年は尾瀬をまわる計画で、福島県の檜枝岐に行きました。檜枝岐は山合の小さな村落で、主な産物といえば蕎麦やきのこ位ですが、静かな良い所でした。街

道沿いに集落があり、中央には役場や学校、消防署、農協、共同温泉浴場などが集まり、まるで教科書に出ている地図のようによい主要な建物が一軒ずつの小さな村です。農協で食事の材料を買いこんで、村から5 km程離れた川原のキャンプ場にテントを張りました。新しくタープという、テントの外に張る屋根のようなシートも購入したので、雨も大丈夫。空間も広がりました。でも、キャンプ場でさえも、自分の領域は広く確保してゆったりとしたと思うのも変な話ですが…。

テントの生活は、食事と寝ること遊びが中心で、主婦としては基本的には家でしていることと同じです。それを皆であれこれ話し合いながら進めていくのがおもしろく、日頃家事などしない夫も頼りになります。子ども達も、山の温泉に行ったり、水運びをしたり、ちょっと不便な生活を楽しんでいるようです。さて、今年の休暇はどこでキャンプをしようかな…。ただ今、計画中です。

幼児の教育

第九十二巻 第八号

(一九九三年八月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

平成五年八月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二一一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

東京都港区三田五一一二一一

発売所 株式会社 フレーベル館

東京都文京区本駒込六一四一九

振替口座 東京九一一九六四〇

電話〇三一一五三九五―六六〇四

●本誌御購読の御注文は発売所フレール館にお願いいたします。

●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

新任保育者研修シリーズ①

保育のポイント 100

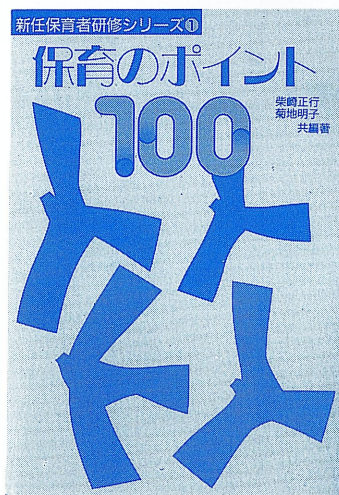
柴崎 正行
菊地 明子
編著

教人

A5変型判

232頁

定価2,400円(税込)



新任保育者が
さまざまな保
育の問題点に
出会った場合、
保育への取り
組み方のポイ
ントが分かる。

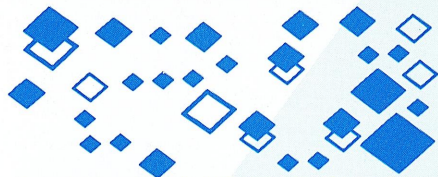
新任保育者時代に直面する、保育への期待と不安が入り交じった気持ちを整理してくれます。保育の各々の分野のエキスパートの方々が、問題点の要点整理を示していて、新任保育者が問題点に出会った時の保育のポイントが分かります。新しい保育への共通理解を図るポイントが確認でき、園内や地域の勉強会や研修会の参考資料に役立ちます。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

子どもに生きた人・倉橋惣三

—その生涯・思想・保育・教育—



幼児教育の偉大な先駆者・倉橋惣三の生涯、思想、理論、著作資料などをすべてを紹介する。

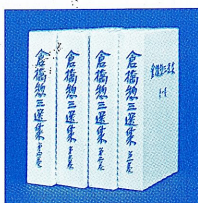
今なお大きな影響力を持つ倉橋惣三の保育思想を、すべての著作と周辺の人たちの証言によって説きあかし、これからの日本の保育の在り方を示す。倉橋惣三研究の決定版。

森上史朗・著

A 5判 488頁 定価3,800円(税込)

倉橋惣三選集 全4巻

上製本各巻ケース付き



わが国の幼児教育の理論を確立した倉橋惣三の教育論・随筆などを集大成した定本です。今でも保育界においては読み、語り継がれて保育者にとっての座右の書。

① 幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル
B 6判 416頁 定価3,000円(税込)

② 幼稚園雑草
B 6判 448頁 定価3,000円(税込)

③ 育ての心・就学前の教育他
B 6判 472頁 定価3,000円(税込)

④ 保育案他
B 6判 456頁 定価3,000円(税込)

生活をつくる子どもたち 倉橋惣三理論再考



倉橋理論実践期の保育を調査研究し、子どもの生活、発達、就学後の成績、母親へのアンケートなどから、この理論の重要性を改めて実証した労作の書。

飯島婦佐子・著

A 5判 244頁 定価1,700円(税込)

倉橋惣三「保育法」講義録—保育の原点を探る—



昭和10年、倉橋惣三が最も円熟した時に行った保育法の講義録です。これからの子ども主体の保育への数々の提言がもりこまれ、幼稚園真諦他の著作と対照し、理解の助けとする脚注付です。新幼稚園教育要領と関連する箇所も示され、現代の保育にとっての倉橋理論の意義を論ずる津守真先生の序文つき。

菊池ふじの・監修 土屋とく・編

B 6判 256頁 定価1,500円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。